

# 河川基金助成事業

## 「身近にある川に触れ、川を感じ、川に学ぶ」 報告書



助成番号：2022 - 7111 - 006

宮城県仙台市学校法人ろりぽっぷ学園 幼保連携型認定こども園ろりぽっぷ泉中央南園

2022 年度

助成番号	助成事業名			学校名		
2022 - 7111 - 006	身近にある川に触れ、川を感じ、川に学ぶ			幼保連携型認定こども園 ろりぼっふ泉中央南園		
校長名	佐藤 眞弓	担当教諭名	白旗 璃央			
過去の助成実績	なし (あり) (助成番号：2021-7111-001 助成事業名：川ってみんな違うんだね。それぞれの川が持つ特徴を学ぶながら川の不思議さや神秘さに心を動かす事業					
キーワード						
対象児童生徒	高校生 ( 年 名) 中学生 ( 年 名) 小学生 ( 年 名) 幼児 (年長児9名)					
対象河川名	七北田川	活動場所の指定状況	(なし) 子どもの水辺 水辺の楽校			
年間学習計画 (シラバス) における本助成事業の位置づけ						
<p>テーマ : 身近にある川に触れ、川を感じ、川に学ぶ</p> <p>ねらい : 身近な川での活動を通して、生き物や水辺の観察に興味・関心を持つ。</p> <p>評価の観点 : 一人一人の子どもが生き生きと楽しく活動に参加出来たか。川での体験を通して興味・関心を持つことが出来ているかを「幼児期の終わりまでに育って欲しい10の姿」を観点にしていく。</p> <p>活動時期 : 4月～翌年3月</p>						
活動形態	総合的な学習の時間	各教科学習 ( )	各教科学習 ( )	学校行事	その他 ( )	合計
上記の活動時間数	10時間	時間	時間	時間	時間	時間
支援者等 (複数記入可)						
保護者	外部小学校	外部中学校	外部高校	外部大学	市民団体	専門家等
河川管理者	行政機関 (博物館、資料館) 等		関係団体 (漁協、農協) 等		企業	その他
支援概要						
活動成果	発表形態			成果作品		
	(学級単位) 学年単位	学校全体				
対外発表 ( )						
安全対策に関する課題						
<p>・川遊びを行う前にインストラクターとRACリーダーの職員が職員全体に河川研修を行い、川の安全な遊び方を学習する機会を設けた。また河川活動での事故や予測される子どもたちの行動等、起こりうる危険を把握し、さまざまなヒヤリハットを元に話し合い、子ども自身が川の危険性を感じ安全な方法を知ることが課題である。</p>						
活動の成果と今後の課題・展開						
<p>・子どもたちは身近にある「七北川」での遊びを十分に楽しみ、川に親しみを持って活動に参加する姿が見られた。川や周囲の自然に触れ合う中で川に生息する生き物に出会い、発見した喜びを味わい、水辺の環境など更なる川への興味へと繋がっていった。幼児期に大切な直接的な経験を通して①健康な心と体 ②自立心 ③協同性 ④道徳性・規範意識の芽生え ⑤社会生活と関わり ⑥思考力の芽生え ⑦自然との関わり・生命尊重 ⑧量・図形・文字等への関心・感覚 ⑨言葉による伝え合い ⑩豊かな感性と表現など、あらゆる視点から子どもの育ちが捉えられた。今回の川遊びを経験し、改めて子どもの成長を汲み取ることができたが、今後、小学校へ子どもの様子を分かりやすく伝えたり、今後の学校生活へスムーズに移行することに繋げていくことが課題である。</p>						
活動内容と実施時期 (主な活動を2つのみ記入)						
	部門	大分類	中分類	小分類	実施時期	
データベースに登録する活動分野	学校部門	教育活動	系			月
			系			月

※データベースに登録する活動分野は、助成事業実施の手引き P.47 の一覧表から代表的なものを2つ記入して下さい

〔学校部門〕 共通

助成番号	助成事業名	学校名・学校長氏名
2022-7111-006	身近にある川に触れ、川を感じ、川に学ぶ	学校法人ろりぼっぷ学園 幼保連携型認定こども園 ろりぼっぷ泉中央南園

## はじめに

ろりぼっぷ泉中央南園は、緑が豊かな“杜の都仙台”の北部に位置し、園舎の目の前を七北川が流れている場所にある。身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならぬことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになって欲しいと願っている。また、河川学習を友だちと関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げる子どもに育てて欲しいと願っている。

今年度も新型コロナウイルス感染症対策を図りながら園生活が制約され、行事の短縮などをしなければならぬ状況があった。この河川活動は開園した当時から子どもたちの成長のために大切に捉えてきた活動であったため、職員同士で何度も実施の方法を検討した。子どもたちが川に触れながら、一人ひとりが感じたことや体験がしっかりと根を下ろし、成長に繋げたい、学びの場になって欲しいという願いを込めて実施した。

昨年に引き続き、保護者の協力と理解を頂きながら実施に至るが今回の河川活動は、改めて大きな意味を感じる事が出来た経験となった。



写真1



写真2



写真3

フィールド：七北田川「園舎前にある川への道のり」

日付：令和4年4月

成果：

第1の障壁 急な斜面(写真1)

園舎の前にある広い野原。「あのね…」と5歳児クラスの子どもたちが「川へ行く途中に秘密基地があるんだよ」と、4歳児へ伝えたと早速、見に行くことに。しかしそこには斜面や草木が生い茂る場所。ためらうことなく勢いよく降りる子どもの姿や、急な斜面に戸惑い足がすくむ姿があった。様々な思いと葛藤しながらも、傍に友だちがいる安心感が挑戦する気持ちを後押しした。

第2の障壁 野原(写真2・3・4)

斜面を降りた先に広がった野原には自分たちの背丈にまで伸びた草が生い茂っていた。これでは秘密基地に辿りつかない。秘密基地に行くためにはどうしたらよいかを話し合う姿があった。そこで辿りついたのは草取りをしたらいいのではないかという意見。みんなが同意し草取りが始まった。身近な環境を自分たちで考え整えようとする気持ちがここでもまた見られた。

何度も足を運び自分たちで整えていくからこそ特別な場所となった環境に心を踊らされ川への好奇心や期待感が膨らみと共に、大切な場所を守りたいという思いも芽生えていた。

(10の姿：健康な心と体・自立心・協同性  
自然との関わり・生命保持)



写真4



写真5



写真6



写真7



写真8



写真9

フィールド：七北田川「生き物との出会い」  
日付：令和4年6月・7月  
成果：  
2つの障壁を乗り越え、たどり着いた先に見えた光景に川の素晴らしさを感じた子どもたち。  
河川学習の講師である菅原さんが捕まえてきた魚やカニを観察し、自分たちの身近な川にたくさん生息していることに気づき、手で触ったり、じっくりと観察したりしたことで川への興味が深まっていた。(写真5～写真9)



写真10

フィールド：七北田川「ある疑問」

日付：令和4年7月

成果：

川について知っていく中である疑問が浮かんだ。

「川の水はどこに繋がっているの？」

そこで子どもたちと一緒に考えていった。「川の水は山から来ているんだよ」「山の水はどうやってできるの?」「氷が溶けて流れてくるんじゃない?」「山から川に水がきているってこと?」「そういうことだね」「そしたらその後は?」どんどん疑問が生まれていきます。「川博士の菅原さんに聞いてみよう!」早速連絡をしてみることに。

講師の菅原さんは子どもの持つ興味や関心を広げるために、すぐに来園し、ある映像を見せてことになった。(写真10)そこには色分けされた線が3本。実際に見てみると、宮城県にある大きな川だった。その川の始まりはすべて山。そして最後は海へと繋がっていった。その映像を見て「山から川、川から海に行くんだ」と目を輝かせる姿があった。それに気付いた子どもたちは、「川遊びごっこを展開させていく。ある子は山になりきる。(写真11)ある子は新聞紙で川の中にある石や草、生き物を再現し網を使って生き物を採集する練習を始めた。(写真12・13)子どもたちの発想力は無限大である。興味を持ち調べる過程を十分に楽しみ、自然の仕組みにも目を向けようとする気持ちが育まれている。

(10の姿：思考力の芽生え・自然との関わり・生命尊重)



写真11



写真12



写真13



写真14



写真15



写真16



写真17



写真18

フィールド：七北田川河川敷

日付：令和4年8月

成果：

初めての川遊び体験に、期待を持ちキラキラと輝く笑顔の子、緊張した表情の子の姿が見られていた。そんな中、朝の登園時から「川怖い。入らない」と話すNちゃん。思いを受け止めながら、川の傍まで行くことを提案すると「いいよ」と答えた。友だちが川の間を楽しく遊んでいることに気づき、川に入ろうとする保育者の手を強く握り離さない姿があった為、「一緒に入る？」と質問すると「やっぱり入る」と心の中の恐怖心と戦い乗り越えようとする姿が見られた。それから、川の中を歩く練習（写真14）をした後、水中望遠鏡や網を使い川にいる生き物を捕まえようとしたり、観察したりすることで興味が広がっていった。（写真15・16）生き物を捕まえようとする中で、どちらかに網を向けたら捕れるか、どんなところにいるかなど子どもたちなりに考えながら試してみる姿もあった。また、「ライフジャケット着ているから浮かぶよ」「浮かぶのやってみよう」と新たな活動に向け期待を高めた子どもたち。そこで、仰向けになり身体力を抜いて浮かぶ練習をすることに。しかし練習をするかしないかは自分で決めてよいことを伝えると、各自が自分の心と向き合い相談して決断する姿があった。自分でやると決めた子の中には、やりたいけれど恐怖心を抱き葛藤する姿もあった。すると、近くにいた友だちから「がんばれー」と励ましの言葉を受け挑戦。出来た喜びから笑顔を見せ、達成感や満足感を感じている。（写真17）川からあがった子どもたちは見つけた生き物を「くろみ組にも見せてあげたい」と話す姿や、「みんなで育てたい」と決断し命を守るためにご飯や育て方を図鑑で調べていた。親しみを持ち世話をしながら生き物への親しみが深まっている。（写真18）

（10の姿：健康な心と体・自立心・協同性  
社会生活との関わり・思考力の芽生え  
言葉による伝え合い）



写真19



写真20



写真21

フィールド：七北田川河川敷

日付：令和4年8月

成果：

前回、川遊びを経験し、川に触れ、川を感じた子どもたちは2回目の川遊びにも期待を高め、自ら身支度に意欲を持って取り組む。

「今日もカニいるかな」「絶対に魚を捕まえるぞ」と一人ひとりが目的を持ち参加。早速川に足を入れ、魚がいる場所を友だち同士で教え合い、石の下を見てみたり、草むらに網を入れてみたりと生き物の発見を心待ちにしていた。すると早速、大きなカニを発見。「この前のカニのお父さんかな?」「女の子かな?男の子かな?」とカニの腹を観察する姿もあった。カニの雄雌を見分ける方法があるかどうかを知りたい!と好奇心でいっぱい。

菅原さんからカニの特徴や雄雌の見分け方を教えてもらい、更に今日、伊賀深まる子どもたちだった。更に子どもたちの探索活動は続き様々な発見を楽しみ、それを友だちと共有していった。(写真20)そして、「今日も浮かぶ練習をしたい」と子どもたち。水に浮かんだ際の身体感覚を楽しんだり、心地良さを味わったりする姿も見られていった。(写真21)川からあがり、採集した生き物を園で飼育をするかどうか話し合う。

「今、育てているメダカやザリガニを大切に育てたい」という声上がり、今回、捕まえた魚やカニを川へ返す姿があった。

日々の飼育活動を通して命の尊さを感じていた。

(写真22)

(10の姿：健康な心と体・自立心・協同性  
社会生活との関わり・思考力の芽生え  
自然との関わり・生命尊重  
言葉による伝え合い・豊かな感性と表現)



写真22





写真 2 3



写真 2 4

フィールド：七北田川河川敷

日付：令和4年9月

成果：

前回までの川遊びの中で、川の生き物との出会いを楽しみ、飼育活動の難しさや命を守るということを、経験を通して考える姿や、全身で川の水の心地よさを味わう姿が見られた。更に川遊びを楽しめるようEボート体験を行った。(写真23・24)

初めての活動に不安を感じる子どももいたが、今までの川遊びの経験から「楽しいかも」「やってみよう」と自己決定し参加する姿があった。また、季節が夏から秋へと移り変わり、川の周りの環境にも目を向けられるように草花採集や自然物で染め物ができる環境を作っていた。「このお花は何色になるかな?」と疑問を抱きながら行う姿も見られた。

(写真25)身近にある草花を水に入れ沸騰させることで色が出る不思議や楽しさを味わう姿や、「この綺麗な色になった花の名前を知りたい」と興味を持ち、図鑑で調べる姿へも繋がった。(写真26)また「何色になるかな」と沸騰するのを待つ時間も子どもたちにとっては期待がどんどん膨らむ夢の時間のようなだった。(写真27)川に入るだけでなく、様々な川の遊び方を楽しむ姿や、身近な環境にも目を向け興味を深めていった。

(10の姿：健康な心と体・自立心・協同性  
社会生活との関わり・思考力の芽生え  
自然との関わり・生命尊重  
言葉による伝え合い・豊かな感性と表現)



写真 2 5



写真 2 6



写真 2 7



写真28



写真29



写真30

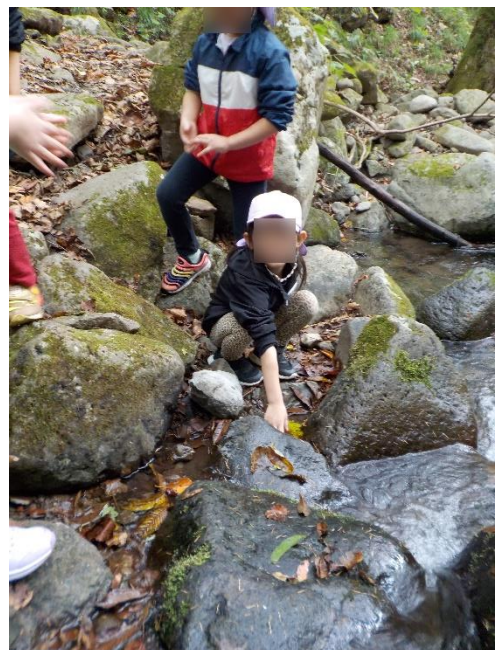


写真31

フィールド： 泉ヶ岳ひざ川

日付：令和4年10月

成果：

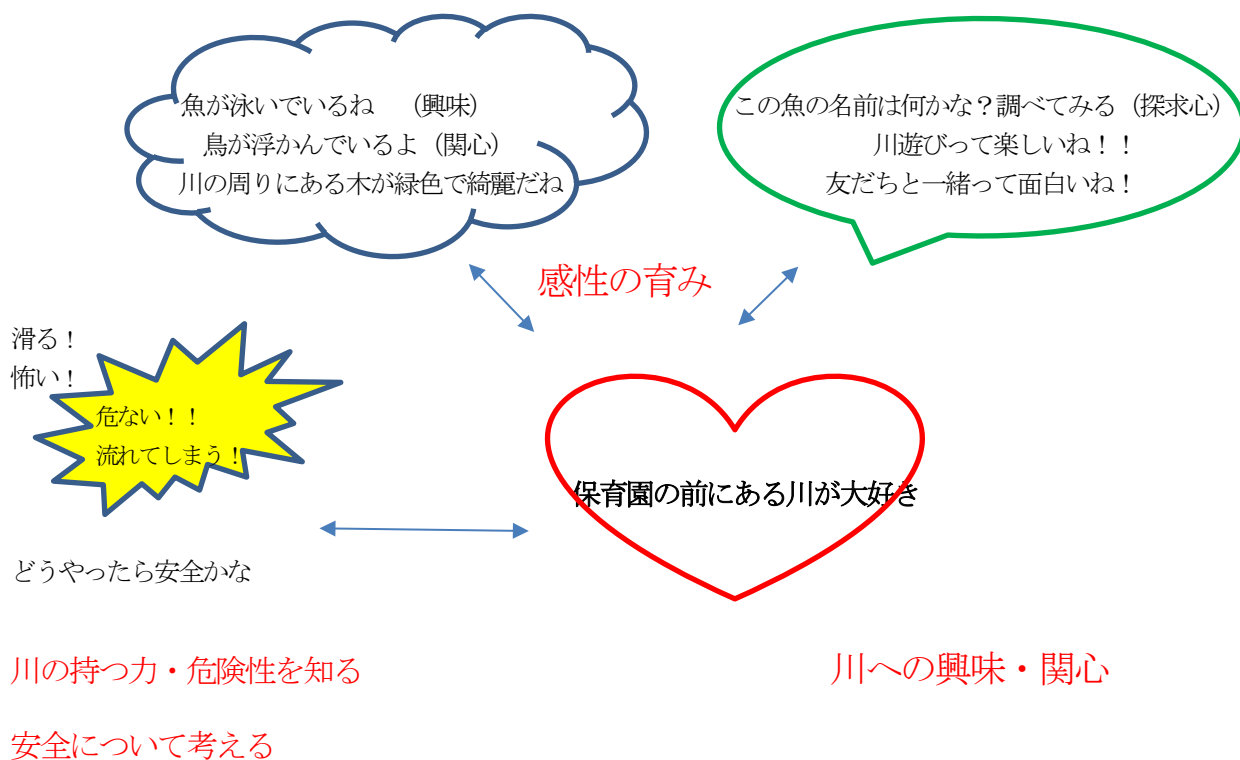
「七北田川がどこから流れてくるのかな」「七北田川の始まるの場所へ行ってみよう」という子どもたちの好奇心から泉ヶ岳に行った。七北田川とは異なる山の光景（森林）に目を輝かせ、川の周りの環境に子どもたちは引き寄せられた。（写真28）

登っている最中にも水が流れているのに気づき「あった」と発見を楽しむ姿も見られた。（写真29）また、大きなキノコや木、どんぐりなど様々な自然物を探索していった。そして登り終え目に入ったのは川と大きな石。「なんでこんなに大きいんだろう？」と疑問を抱きながら、子どもたちの興味は水の温度に移っていった。石が揺れないか自分の足で確かめ、歩く場所を考えながら石を渡る子どもたち。（写真30）友だちが恐怖心から困っていると手を差し伸べる姿も見られた。そして実際に川の水を触ってみると「冷たい」と話す姿があった。先月までは川に入り遊んでいたことを振り返っていくと「秋になったからかな？」と季節による変化に目を向けていった。また、七北田川とひざ川の違いに気づき「川の流が速い」「石が大きい」と様々な違いに気づいて発言する姿があった。川による違いが周りの環境や川自体にあること、季節による変化を体験することで更に川への親しみや興味を持ち「冬はどうなっているんだろう」と更に疑問を持って深めていった。

子どもたちにとって1つ1つの体験が「学び」となっている。

（10の姿：健康な心と体・自立心・協同性  
 社会生活との関わり・思考力の芽生え  
 自然との関わり・生命尊重  
 言葉による伝え合い・豊かな感性と表現）

## 《河川活動を通じた心の基盤づくり》



自然を体いっぱいを感じながら川で遊ぶ体験をし、心が揺さぶられ感性が豊かになる

## 『4歳児クラスへ河川の取り組み方を伝えたい』

3月に卒園する5歳年長組の子どもたちは、卒園する前に「川遊びのための身支度や川遊びを行う方法を4歳年中組に伝えたい」と担任へ声を上げた。7回の川遊びの経験を、4歳児クラスの子どもたちに伝えられる場面を設けていくと、まずは自分たちでどんなことを伝えたいか考える姿が見られた。1つ目は、魚の捕り方。魚を捕る時は山がある方に網を向ける。「魚は石の下や草の中に隠れているから足で避けてから捕る」と伝える子どもたち。(写真32) 実際に練習できるように、石や草、魚を折り紙や画用紙で作って準備し実践してみせる姿もあった。4歳児の子どもが行う場面では見守りながら、「いいよ!」「できている!」と認める声も掛けていた。(写真33) 2つ目はライフジャケットの付け方。ライフジャケットを付ける意味をまずは説明していく。「自分たちの命を守るため」と伝えた後、5歳児の子どもたちが4歳児の子どもたち一人ひとりに丁寧に着せてあげていた。(写真34) 3つ目は川での歩き方。再び歩き方を実践して見せる。「前の人の肩を持つよ」「ライフジャケットの肩のところね」「ゆっくり歩くの」と5歳児。(写真35) 「なんでゆっくりなの?」と質問する4歳児に「石がたくさんあって危ないからだよ」「転ばないようにするため」と優しく教えてくれた。実際に見せてもらったことで真似ながら歩く4歳児の姿を見て「もう少しゆっくり」「いいよ!」とアドバイスをする姿もあった。(写真36) 4つ目は浮かび方。「溺れてしまったときの為に必要なんだよ」と伝え、浮かび方を伝えていく。一人ひとりが実践していく中で傍に付き足や手の開き方についてアドレスをしていた。(写真37) そして最後は、生き物の世話の仕方。もうすぐ卒園する自分たちが変わり、川で捕まえたカニや魚の世話をお願いしたい思いを伝えていった。その思いを聞き「お世話する」と答えた4歳児。水槽の掃除の仕方や、餌のあげかたなどひとつひとつ丁寧に伝えていった。(写真38) 自分たちの経験を言葉で伝えていく難しさを味わいながらも「どのようにしたら伝わるか」試行錯誤しながら工夫していく子どもたち。伝わった喜びを感じ、達成感や満足感を味わったことで自信に繋がっていった。4歳児はいつも一緒に過ごす大好きな友だちから教えてもらったことで、来年度への川あそびへの期待が自然と芽生えたと共に、川の危険さにも気付く子どもたちだった。その様々なことを実際に体験した子どもたちが次の学年へと思いを繋げていった。



写真 3 2



写真 3 3



写真 3 4



写真 3 5



写真 3 6



写真 3 7



写真 3 8

## まとめ

1年間の川遊びを通して様々なことを学んだ子どもたち。実際に出会った生き物との出会いではたくさんのおもいが交差していた。「魚やカニをこども園の中に連れていきたい」「だけど・・・生き物にも家族やお家があるから離れるのはかわいそう」長い時間を掛け考えた子どもたち。「自分たちなら育てられるかもしれない」と連れて帰ったが、死んでしまったカニ。その姿を見て「死んでしまって悲しい」と泣く子どもたち。「やっぱり連れて帰らなきゃ良かった」「川に戻そう」と後悔する子どもたちに「なんで死んでしまったのか考えてみよう」と提案すると「ごはんあげるの忘れてしまっていた」「水槽の掃除も忘れてた」と自分たちの行動を振り返っていった。「今まで忘れてしまっていたことをきちんとやったらどうなるかな」と質問すると「元気なまま」「死なないかも!」と希望を見つけ表情が晴れていく。そこでもう一度「今、園にいるカニをどうするか」聞いてみると「育てたい」と意志を伝えていった。それから、忘れないように当番表を作ったり、毎日観察したり、「命を守る」という大変さを実感しながらも生き物への親しみを深め、命の尊さや大切さを川遊びを通じて実感していった。そして自分たちのその大切な思いを4歳児に自ら伝えることで命のバトンは繋がれていった。

園の目の前にある七北田川から川への興味関心が生まれ、心も体も開放して全身で楽しんだ川遊び。自分の感性のままに行動するその場所で川が持つ危険も知り、自分の身を自分で守りながら行動する必要性も実体験を通して学んでいったのだった。

幼児期に大切な直接的な経験を通して①健康な心と体 ②自立心 ③協同性 ④道徳性・規範意識の芽生え ⑤社会生活と関わり ⑥思考力の芽生え ⑦自然との関わり・生命尊重 ⑧量・図形・文字等への関心・感覚 ⑨言葉による伝え合い ⑩豊かな感性と表現など、あらゆる視点から子どもの育ちが捉えられた。今回の川遊びを経験し、改めて子どもの成長を汲み取ることができたが、今後、小学校へ子どもの様子を分かりやすく伝えられたり、今後の学校生活へスムーズに移行することに繋げていくことが課題である。

助成番号	助成事業名	学校名
2022-7111-006	身近にある川に触れ、川を感じ、川に学ぶ	ろりぽっぶ泉中央南園

主な実施箇所

※環境学習を数カ所で実施している場合は、代表的な箇所を2カ所程度記載してください。  
 ※ダム等の施設を見学した場合は、当該施設の位置図を記入して下さい。  
 (縮尺は 1/50 万~1/100 万程度)  
 ※活動場所在「子どもの水辺」、「水辺の楽校」に指定されている場合には、指定場所と名称を記載してください。

助成事業の主な実施箇所

